ひまわりからのメッセージ
121号
2021.10.18
NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

鳥たちのことば

先日、偶然「ワイルドライフ」という番組を観ていたら、鳥のことばを研究している方のことを紹介していました。その方は、シジュウガラ科の四十雀、山雀、小雀などを軽井沢で観察を続け、鳥の啼き声を二百種以上収録し、周囲の状況と合わせて分析した結果、天敵に対しては文章をあやつって危険を知らせていることが分かったということでした。

冬になると、我家には鶸（ひよどり）がやって来て、かん高い声で仲間を呼んでいるので、鳥には鳥のことばが在ると常々思っていましたので、番組の内容に納得しつつ見入っていました。

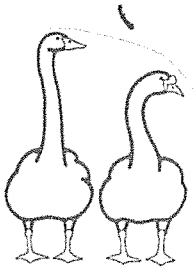
私が知っている鳥といったら、鳥に鳩、雀、鶯、雲雀くらいのものですから、もちろんシジュウガラ科の鳥たちの啼き声なんて分かりません。でも、その方によれば「集まれ」の時は「ディーディーディー」、へびが来た時は「ジェージェージェー」、鷹が来た時には、鷹には聞こえない周波数の声で「ヒーヒーヒー」と啼いて、仲間に危険を知らせるのだそうです。面白かったのは、百舌（モズ）の剝製を置いたところ「ピーピッ、チチチチ」と啼き、「警戒しながら集まれ！」と知らせたというのです。鳥に鳥のことばがあると思うと、今も家の周りでさえずっている小鳥たちが仲間と何を話しているのだろう……と、何となく耳をそばだてたくなります。

ところで、人には、人のことばがあります。マスク生活が普通になってしまった今、今までは目差や表情や体の動きなどの言葉以外の情報も加えて相手と理解し合えていたことが難しくなってしまいました。マスク生活になってから、私は今まで以上に気を使うようになりました。特に子どもたちと話す時には、聞きちがいをさせないように、マスクの中でも大きく口をあけるようにしていますが、それでも「エッ、今、何て言ったの。」と言われる始末です。難しいですね。

その上、交互のやりとりとしての会話が成立しないことも多くなりました。一方的に話し続ける子や不安な目差を向けて黙り込んでしまう子など、コロナ禍の子ども達の心の動きに胸が痛くなります。早くマスクなしの生活に戻れるといいなと思っています。

庭の柿が今年は枝もたわわに実っています。そのうちに鶸が仲間を呼ぶ声がひびいてくることでしょう。深まりゆく秋です。

就学・進級を前に 教育支援の難しさ



私は西濃圏域のいくつかの市町で就学や進級にかかわる教育支援委員会に参加させていただいています。昔は適正就学指導委員会と言っていましたが、近年は、保護者の方と話し合いを重ねて、合意形成をしていきましょうということになっています。話し合いを重ねるのは当然、園や学校の担任やコーディネーターの先生方と保護者です。その話し合いの場では、園や学校からは、集団生活の中で見受けられる子どもの実態や、そこでの支援の仕方が話されることでしょう。

でも、合意形成には至らなかったということも当然あると思われます。そのために当事者（担任）以外の人に相談する機会（教育相談）が設けられています。

そして最終的に教育支援委員会に委ねられることになりますが、時に「保護者の合意が得られないので、このまま通常判定に」とか「保護者が希望しているので通級をつけます。」ということばを聞くことがあります。本当にそれで良いのでしょうか。全て保護者の希望に即した決定をするのなら専門家会議など不要です。「親ごさんとの同意は難しく、最終的には意向通りに進まれると思いますが、お子さんの実態を考え、家庭のこと（例えば兄弟で支援級入級）なども含めて考慮した結果○○が望ましいと思われる」と、専門的な見地から意見を言うところが委員会ではないでしょうか。でもそのためには、より正確な実態把握が必要です。

子どもたちは何故、どんな点で困っているのか

園の担任も学校の担任も、目の前の子どもが何に困っているのか、今後環境が変わった時にどんな困りがあると考えられるのか。実態をよく知っているのは当然担任のはずです。加配の人や支援員に任せているから分からない等と言うようでは担任落第かもしれません。支援委員会に提出される資料の内容についてどの様にすべきなのか、考えさせられることもあります。

検査結果をどのように解釈するのか

子どもたちの実態把握のために、発達検査や知能検査が実施されることが増えてきました。しかし、個人内差のある子の検査結果については、余程慎重に考えて

いくべきだと思います。例えばウェクスラー検査など個人内差を見ようとする検査の場合、全検査IQを示すだけでいいのかどうか、むしろ指標も考慮に入れて考えるべきではないかと思います。

もちろん検査の数値だけが絶対的なものではありませんが、検査をした以上、その数値の示す意味を保護者に伝えるべきでしょう。

「就学先を決めるのは親です」と担任の先生に告げられて……

教育相談で出会ったお母さんから、次のような相談を受けました。「園の先生から『就学先を決めるのは親さんですからね。よく考えて決めて下さいね』と言われたのです。でも私の子は長子だし、学校のことも分からないし、どうしたら良いのでしょう」というご質問です。

よく聞いてみると、支援学級や通級指導教室のことの説明もされておらず、「決めて下さい」と言われてもお母さんには何のことかさっぱり分からなかったということでした。そこで学校のしくみについてお話をし、知的学級と情緒学級のことを説明しました。するとそのお母さんは、「でも自分で決めなきゃいけないんですね」と、心配そうにおっしゃいます。「お母さんが決められる前に教育支援委員会というのもあって、「お子さんには、こういう就学先はどうですか」と、お勧めもあるので、それから考えて最終的に決めて下されば良いのですよ」と言うと、やっとホッとした表情になられました。

このケースは完全に説明不足ですね。担任の先生がお若くて、十分に就学のしくみが分かっていらっしゃらなかったのでしょうが、それなら主任さんやコーディネーターが配慮してあげると良かったでしょう。

合意形成というのは、無責任であってはなりません。一緒に、真剣に考え、話し合ってこその合意形成です。

パールバック著

『母よ嘆くなかれ』を読んで

私はこの季節になると一人のお母さんのことを思い出します。もう三十年以上も前のことです。そのお母さんには双子の男の子がいました。一人は自閉症のお子さんで、発語もなく、感覚あそびの段階でした。療育を始めて、どの位経った頃だったでしょうか、お母さんが「私、二人共近くの小学校に通わせたいんです。二人揃ってランドセルを背負って行けますよね？どうなんですか？先生！教えて下さい」と言われました。

真剣なお母さんの目を今も時々思い出し、あの時私が言ったことは正しかったのかどうか、あの時でなければならなかったのかどうか、今も思い出すと胸が苦しくなります。

私は高校時代から、この道に進もうと決めていました。私の母は高齢出産で医者からはお腹の子は異常児（当時のことば）だと思っていてほしい。と言われていたそうです。そのためか母の本棚にはパールバックの『母よ嘆くなかれ』が置かれていました。『大地』という本を書いたパールバックにはダウン症のお子さんが生まれていました。彼女はお子さんの発達の遅さに疑問をもち、それこそ世界中の医師を訪ね歩きました。でも、誰も本当のことを話してはくれなかったのでした。

けれど中国で、彼女ははじめて真実を知らされるのです。お子さんの障がいの真実を……。長い長い旅路のはてにやっと真実に出会ったのです。

私は、この本を読んでいましたので先述のお母さんの問いに対して「おそらく二人が一緒にランドセルを背負って小学校へ行くのは難しいと思う。」と伝えたのでした。

後で聞いたところによると、その日お母さんは二人の子を車に乗せ、カーステレオのボリュームを最大にして泣きながら走ったと言われました。就学までにはまだ間があったあの日に言うべきだったのかどうか……分かりません。

「でも先生、私は学校は迷わなかったよ。養護学校（今の特別支援学校）に入れるのに迷わなかったよ。」とお母さんは言って下さいましたし、その後も色々なことを相談して下さったのでしたが、何十年経っても私には忘れることはできません。

真実を伝えるということは、伝える方も伝えられる方も、大きな深い傷を負うものだと思います。けれども、お子さんの困りを予測できるにもかかわらず「何とかなるでしょう。」とか「見守っていればいい。」とか無責任なことを言うことは許されないと思うのです。

お子さんの実態を知り、困りの要因分析をして手立てを探っていくためには、いつになっても、何歳になっても学んでいかなくてはなりません。保護者の方も、そしてお子さんを取り巻く多くの人々も同じだと思います。もちろん、この私もです。

お知らせ

センター親の会は 11/8　12/13（第二月曜）
九時三十分～です。
スイトピアセンター 六階　6-3学習室